

浦島太郎

昔、丹後の国に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四、五の男ありけり。明け暮れ、海のうろくづをとりて、父母を養ひけるが、ある日のつれづれに、釣りをせんとして出でにけり。浦々島々、入り江入り江、至らぬ所もなく、釣りをし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしけるところに、まが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げけり。浦島太郎、この亀に言ふやう、「なんぢ、生あるものの中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきものなり。たちまち、ここに

5

昔、丹後の国に浦島太郎と申して、年の頃は二十四、五歳の男がいた。朝夕、海の魚をとって、父母を養っていたが、ある日の所在なさに、釣りをしようと出かけていった。海岸や島々、入り江など、行かない所はなく、釣りをし、貝を拾い、海藻を刈るなどして、たときに、えしまが磯という所で、亀を一匹釣り上げた。浦島太郎は、この亀に向かって、「おまえは、命のあるものの中でも、鶴は千年、亀は万年とあって、寿命の長いものだ。すぐさま、ここで命を取るとは、かわいそ

て命を絶たんこと、いたはしければ、助くるなり。常には、この恩を思ひ出だすべし。」とて、この亀をもとの海に返しけり。

うなので、助けるのだ。いつも、この恩を思い出すがよい。」と言って、この亀をもとの海に返した。

次の日、浦島がいつものように海岸に出ると、美しい女が小舟で流れ着いた。「私は沖で嵐に遭って、みんなと別れ別れになってしまったのです。どうか、この舟で私の国まで送ってください。」女はさめざめと泣いて頼むのだった。浦島は、かわいそうに思い、女の案内する方へ舟をこいで行った。やがてたどり着いた所は、金銀で造った美しい御殿——竜宮城であった。二人は不思議な縁にひかれて夫婦の契りを結んだ。まばゆいばかりの御殿の四方は、四季それぞれの風情をそえていた。

まづ東の戸を開けて見れば、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞の内よりも、うぐひすの音も軒近く、いづれのこずゑも花なれや。

南面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春を隔つる垣ほには、卯の花や、まづ咲きぬらん。池のはちすは露かけて、みぎは涼しきさざ波に、水鳥あまた遊びけり。木々のこずゑも茂りつつ、空に鳴きぬるせみの声、夕立過ぐる雲間より、声たて通るほととぎす、鳴きて夏と知らせける。

西は秋とうち見えて、四方のこずゑも紅葉して、ませの内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、真萩が露を分け分けて、声ものすぐき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。

さてまた北を眺むれば、冬の景色とうち見えて、四方のこずゑも冬枯れて、枯れ葉に置ける初霜や、山々やただ白妙の、雪に埋もるる谷の戸に、心細くも炭がまの煙にしるき賤がわぎ、冬と知らする景色かな。

夢のように三年が過ぎた。浦島は故郷の両親が気にかかり、いったん帰ることにした。これを聞いた女は永遠の別れと嘆き悲しんだ。「実は私はあなたに助けられた亀なのです。ご恩返しがしたかったです。私の形見に玉手箱をお持ちください。でも、決して開けてはなりませんよ。」

さて、浦島が郷里へ帰ってみると、そこは人が通った跡もなく、荒涼とした野原になっていた。しかも浦島が生きていた時代から既に七百年の歳月がたっており、自分の墓所まであるという。

さて、浦島太郎は、一本の松の木陰に立ち寄り、あきれ果ててぞるたりける。太郎思ふやう、亀が与へし形見の箱、

まず東側の戸を開けて見ると、春の景色と思われて、梅や桜が咲き乱れ、柳の枝も風に揺れ、たなびく霞の中からは、うぐいすの声も間近に聞こえ、どの木の枝も花盛り。

南側を見てみると、夏の景色と思われて、春との境の垣根には、卯の花がまず咲いているのだろう。池の蓮は露を運び、水ぎわの涼しいさざ波に、水鳥がたくさん遊んでいた。木々の枝葉も盛んに茂り、空に鳴いているせみの声、夕立のあとの雲間から、声をたてて飛んでいくほととぎすが、鳴いて夏だと知らせてくれる。

西側は秋の景色と思われて、辺りの木々も色づいて、垣根の中の白菊よ、霧が立ちこめる野の端を、萩の露をかき分けて、もの寂しげに鳴く鹿の声に、まさに秋だと知らされる。そしてまた北側を眺めると、冬の景色と思われて、辺りの木々も冬枯れて、枯れ葉に降

りた初霜よ、山々は真っ白で、雪に埋もれた谷の入り口に、細々と立つ炭がまの煙ではつきりとわかる炭焼きの仕事は、冬を知らせる景色かな。

そこで、浦島太郎は、一本の松の木陰に立ち寄り、すっかり途方にくれて座っていた。太郎が思うには、亀がくれた形見の箱は、

「あひかまへて開けさせたまふな。」と言ひけれども、今は何かせん、開けて見ばやと思ひ、見るこそくやしかりけれ。この箱を開けて見れば、中より紫の雲三筋上りけり。これを見れば、二十四、五のよはひも、たちまちに變はり果てにけり。

さて、浦島は鶴になりて、虚空に飛び上りけり。そもそも、この浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中にたたみ入れにけり。さてこそ七百年のよはひを保ちけれ。「開けて見るな。」とありしを、開けにけるこそ由なけれ。

〈出典『日本古典文学大系38』（岩波書店、一九五八年）〉

「決してお開けなさいますな。」と言ったが、今はしかたがない、開けて見ようと思ひ、開けて見たのは悔やまれることである。この箱を開けて見ると、中から紫色の雲が三筋立ち上った。これを見ると、二十四、五歳の姿も一瞬にして變わり果ててしまった。そうして、浦島は鶴になって、大空に飛んで行ってしまった。さて、この浦島の年齢を、亀の取り計らいで、箱の中にたたみ入れていたのだった。そんなわけで七百年も生き続けられたのである。「開けて見るな。」と言われたのを、開けてしまったのはつまらないことであった。

※1「モウ」または「マウ」と読む。

【注】

- ① 丹後の国 旧国名。現在の京都府。
- ② うろくづ 魚。
- ③ みるめ 海藻の名前。
- ④ 糸しま 不詳。現在の兵庫県淡路市にある絵島によったものか。
- ⑤ 糸 細い枝のこと。
- ⑥ 垣ほ 垣根。
- ⑦ 卯の花 ウツギのこと。初夏に白い花が咲く。
- ⑧ はちす 蓮の古い呼び名。夏に白または薄紅色の花が咲く。
- ⑨ みぎは 水ぎわ。

- ⑩ ませ 竹や木を粗く編んで作った低い垣根。
- ⑪ 野辺 野の辺り。野原。
- ⑫ 白妙 白い色。
- ⑬ 谷の戸 谷の入り口。
- ⑭ 炭がま 炭焼きがま。
- ⑮ しるき はっきりとした。
- ⑯ 賤 身分の低い者。
- ⑰ わざ 仕事。